

イアとベルシア、28イタリアとベルシア、29他章の関連文献指示。

本書のメリットは挙げてゆけばきりがないのだが、そのうち最大なのは、疑いもなく編者による親切丁寧な仕事ぶりであろう。例えば、サファヴィー朝期イランを訪れたイタリア人旅行者の記録を調べる場合、これらはⅢ旅行記、Ⅳの19サファヴィー朝史、Ⅳの27ヴェネツィアとベルシアの三項目に分散して収録されており、ともすれば不統一で分かりにくい記載となりがちだが、本書では各項の最後に検索すべき他項目の番号がすべて記されており、参照しやすくなっている。何故 Della Valle の書はⅢとⅣの19の両方に収録され、Membre の報告は「ヴェネツィアとベルシア」の項にか含まれていないのか、など分類上の問題がないわけではないが、いずれにせよ、このすべての項目を調査すれば関連文献の一切が把握できるよう工夫されているのである。これはこのように大部な文献目録を出す際の際に必須の条件ではあるが、面倒な仕事を完遂された編者に敬意を表したい。

紹介

親切丁寧さについて付言すれば、今日我々が史料として用いる十五—十八世紀の文

献には、殆んどの場合いくつかの版本があるが、本書ではこれらの版本が出版順にすべて明示されており、これにより今後は、この種の文献を利用する際の面倒な初歩的手続を一切省略することが可能となった。

本書の如きビブリオグラフィは、何よりも正確さ、そして遺漏のなさが要求されるが、この点においても、筆者の見る限り本書には何の不満もない。同種の書として M. Saba, *Bibliographie française de l'Iran*, 3<sup>e</sup> édition, Teheran 1966 があるが、一瞥して両者の差は歴然としている。筆者の如く歴史を専攻する者にとって、本書が史料の存在を調べる場合にも、またこれら史料についての研究や史料を用いた研究を行なう際にも利用することが出来、大変重宝なものである。今後イラン学を志すものにとって、本書は必要不可欠な工具となろう。イタリア東洋学恐るべし、というのが本書を手にとってみた筆者の偽らざる感想である。

(二巻、九四七頁、一九八二年、Napoli)  
(羽田正 京都大学大学院生)

川崎寿彦 著

『庭のイングラント』

——風景の記号学と英国近代史——

本書は、英文学者の著者が、一六世紀から一八世紀の英文学の中に描かれた庭、及び、それと関連のあるいくつかの空間心象を通して、英国近代史、並びに、英国人の精神の近代化の軌跡を追求した書である。かつて著者は、一七世紀中葉に活躍した詩人アンドリュー・マーズウェルの庭園詩を扱った『マーズウェルの庭』と題する著作において、一六五〇年代の初頭が英国近代史の大分水嶺であったことを明らかにした。本書は、研究領域をさらにその前後の時代へと拡大し、庭園史の流れを追って前書の跡付けを試みると同時に、英国近代史、特に政治史の再検討をも図ろうとする力作である。以下、章を追ってその内容を紹介しよう。

第一章は、中世からルネサンス期にかけての庭園論の要約であり、また、問題提起の章でもある。中世の封建領主の城や教会の庭は、『ばら物語』『カンタベリー物語』

に描かれたように、まず、愛の空間——性愛にせよ聖愛にせよ——として意識された「囲われた庭」であった。この象徴性は、ルネサンス期には、エドモンド・スペンサーの『妖精の女王』の庭へと継承され、また、テューダー朝君主や廷臣たちの大庭園は、「悦楽の庭」の性格をはっきり示していた。しかし、これら、〈自然〉に〈人工〉の秩序を持ち込んだルネサンス風の整形式庭園は、やがて〈自然〉の反撃の前に崩壊していく運命にあった。著者は、以後の造園における〈自然〉と〈人工〉の対決の中に、政治的暗喩をも読みこもうとするのである。

第二、三章は、一七世紀前半の王党派の庭園論である。彼らは、プトレマイオスの宇宙を想わせる整然とした同心円の構造を持つ庭を志向していた。しかも、その中心部に設けられた池に「悦楽の庭」としての島を浮べ、全体を「囲われた庭」として、より強調したのであった。それは、不穏な時代を背景に、第二章では国王とその宮廷が絶望的にあこがれる政治的秩序と平和を、第三章では東の間の安らぎを求める地方ジエントリーの現実逃避の願望を、暗示して

いるのである。

しかし、歴史は、彼らの願望を打ち砕くとともに、それまでイタリア、フランスの庭園史と歩調を合わせて発展してきた「悦楽の庭」をも、容赦なく破壊していった。

第四、五章では、庭園破壊者ピュエリタンの庭園観を、詩人マーヴェルの描く謙会派地方ジエントリーの田舎屋敷の庭に見ていく。そこには、造園における〈自然〉と〈人工〉のバランスが崩れはじめ、前者の後者に対する巻き返しが始まる様子が見え、ピュエリタンたちは、単に破壊のみに終始したわけではなかった。彼らは多くの園芸書を著わし、自らの価値観によって庭を再興しようとしたのである。

彼らは、〈人工〉を〈自然〉によって払拭していく方向、すなわち、第五章で展開される、花園という「悦楽の庭」を牧場という「実用の庭」が征服していく力学に従ったのであった。著書は、マーヴェルの詩の創作年、一六五〇年代の初頭に、その後のイングランドの庭の発展方向を決定づけた転換期を見い出すと同時に、庭が伝える政治的暗喩から、この期が英国近代史にとっても大きな転換点となっていたと強調する。

第六章では、革命期のもう一つの変化、動き始めた森に関する考察がされている。

かつて王侯貴族の狩猟として静止していた森は、一六、七世紀になると、産業用燃料、造船用資材、輸出品等の形で、絶え間なく動き始めた。この動きは、社会・経済的な大変動の革命期にますます活発となっていく、次第に森も、庭と同様に、政治的な意味を帯び始めたのである。しかも、この過程は、それ自身が「囲われた庭」であったイングランドが、囲いの壁、海を越えて、開かれていく過程と呼応している。著者は、第七章で、森を動かして海へと乗り出したイングランドの海外膨張の時代精神を、動きを望むピュエリタン——大陸ではエミグレ（移住者）と呼ばれた人々——の中に見ているのである。

王政復古の時代になると、チャールズ二世は、再び〈人工〉を駆使したフランス式バロック庭園の建設に着手した。しかしながら、その後のイングランドは、二度と「悦楽の庭」を見ることはなかった。ピュエリタンたちによって〈自然〉に向かつて歩み始めたイングランドの庭は、一八世紀後半に「英国式」の名で呼ばれることにな

る自然風庭園へと、独自の発達を遂げるのである。この英・仏の造園史の相違は、その後の両国の政治史の違いと密接に結びついていた。その詳察をも含めて、第八章では、〈自然〉に軍配を挙げたピューリタンの庭園論の代表として、ミルトンの『失楽園』に描かれたエデンが考察される。庭園的形式としては挑戦的なまでに反バロック的であったエデンは、後の自然風庭園の造園理論家たちのバイブルとなっていくのである。

英文学史の上で新古典主義時代といわれる一八世紀に入ると、造園における〈自然〉の勝利は、いっそう明確になっていった。第九章では、一七一〇年代初頭の造園意識の向上を背景に、アディソンとポープの庭園論が紹介されている。彼らはともに、「囲う」というあからさまな〈人工〉を隠しつつ、やはり「囲う」という〈自然〉の庭を考えていた。特に、第十章で分析されるポープの庭は、自然風庭園への過渡期に位置しており、そこに設けられた洞穴の存在は、政治的な庭を科学的なものとしていた。それは、同時代の科学的知識に素人ながら熱心な関心を抱く「ヴァーテニュー

ソ」の庭園論としても興味深い。

第十一章では、フランスの思想家、ヴォルテールやルソーの庭園論が論じられる。曲線と不規則さを強調した一八世紀後半のイングランドの庭は、より自由で開かれた市民社会の記号としての側面を強め、ついには、フランスの啓蒙思想家たちからも学ばれるに至ったのであった。最後に、著者は、一九世紀のロマン派の風景詩人たちは、自然のような庭を捨てて、庭のような自然へと入っていく、という展望で、本書を結んでいる。

英文学を中心に、適切な訳と注、及び、豊富な図版や写真を用いて庭の変遷を紹介した本書には、文学の中に歴史を読み込んでいくという謎解きにも似たおもしろさがあり、歴史書としても一読に値する書である。また、これまで歴史家たちの意識の外にあった部分に焦点を当てて新しい歴史像を築こうとする近年の社会史の動向を、十分に反映した書でもあろう。ただ、著者の主たる関心が庭の「政治的」暗喩にあるために、エピソードにあるように、一九世紀以降のイングランドでは、庭の伝えるメッセージは沈黙してしまうことになる。しか

しながら、英国人の心に深く根をおろした庭は、現在、別のメッセージを伝えるものとして、一九世紀の民衆生活史の中で見直されていることを、最後に付加しておきたい。

(A5判 三六三頁 一九八三年五月  
名古屋大学出版会 三八〇〇円)  
(井野瀬久美恵 京都大学大学院生)

### 受贈 図書

(一九八三年三月二四日～五月三〇日)

史学論集(駒沢大学大学院史学会) 一三

古田武彦著、邪馬台国の方法・邪馬台国の

展開(駿々堂出版社)

韓国史研究叢報(ソウル特別市国史編纂委

員会) 三八・三九

社会科学(朝鮮社会科学院図書館) 一

Korea Today(朝鮮社会科学院図書館)

一・二

東方学志(延世大学) 三〇

人文学(同志社大学人文学会) 一三八

文化学年報(同志社大学文化学会) 三二二

産業社会論集(立命館大学産業社会学会)

三四

経済経営論集(龍谷大学経済経営学会)